アンサンブル・フィアツェン
Ensemble14　第2回演奏会

2000年 9月 9日(土) 15時開演
神奈川県民ホール小ホール

ごあいさつ

逃げ出したくなるような猛暑も、ようやくその勢いが衰え、食欲と、恋と、芸術の秋が、もうそこまでやって来ました。バッハイヤーも残すところあと4ヶ月足らず・・・皆様の今年のバッハ体験はいかがでしたか？ 本日は朝からリハーサルに励んでおりまして、外の天気も存じ上げませんが、私共の演奏会に足をお運び頂きまして、誠にありがとうございました。

アマチュアの合唱団がバッハのカンタータを取り上げることが、一時、日本各地で、大変なブームになったことがございました。カワイやヤマハの楽譜売り場に、今でもどっしりと、バッハのカンタータの合唱譜が陳列されているのも、その当時の名残でしょうか？

しかし、各地で生まれたバッハカンタータを演奏するグループも、受難曲を大人数で歌う魅力には勝てずに、どんどんと併合、合併が繰り返されて(ちょうど今の金融機関のように)、自然に消滅して行きました。

そんな中、私にカンタータを指揮する機会を与えてくれたのが、このグループです。もう一つ、アマチュアがバッハのカンタータを取り上げるのが難しいという原因は、合唱曲が少ない割に、難解なレシタチーヴォやアリアを歌ってもらうために、複数のスペシャリストをお願いしなければならないという点があります。しかし、普通の神経の持ち主の集団ならば、当然そこで方向転換を考える訳ですが、彼らは、「そんなら、ソロも自分たちで歌っちまおう」という暴挙に出たのです。

大バッハが、今日の演奏会をどんなお顔でお聞き下さるか・・・。本日共演を快くお引き受け下さった、若く優秀なプロのオーケストラの皆様のお力にお縋りするしかない私たちではございますが、本日のお客様にとっては、バッハ体験の新しいページに出会うであろうことは間違いないでしょう。しかしこの猛暑の中、高い出席率で練習に励んだ彼らに、神様が温かい慈悲の御心で報いて下さるようにと祈るばかりです。アーメン!!

辻 秀幸

§ プログラム §

カンタータ196番 『主はわれらを御心に留めたまえり』
Kantate Nr.196 "Der Herr denket an uns" BWV 196

カンタータ131番 『深き淵よりわれ汝に呼ばわる、主よ』
Kantate Nr.131 "Aus der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir" BWV 131

（休　憩）

カンタータ182番 『天の王よ、汝を迎えまつらん』
Kantate Nr.182 "Himmelskönig, sei willkommen" BWV 182

作曲　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ
Johann Sebastian Bach（1685～1750）

指揮　**辻 秀幸**

声楽　**Ensemble 14**

ソロ　196-3 室橋 明美(S)　196-4 山田 陽史(T)、大石 峰士(B)
131-2 武内 崇史(B)　131-4 内藤 秀司(T)
182-3 大石 峰士(B)　182-4 武内 崇史(B)　182-5 中神 康一(A)
182-6 小泉 孝博(T)

管弦楽　**Millennium Bach Ensemble**

ヴァイオリン	大西 律子 ・ 鍋谷 里香
ヴィオラ	中島 久美 ・ 村元 まり子
チェロ	伊藤 さやか
コントラバス	柳沢 智之
オーボエ	佐々木 美和
ファゴット	井上 直哉
リコーダ	古橋 潤一
オルガン	大塚 直哉

カンタータ196番『主はわれらを御心に留めたまえり』

Kantate Nr.196 "Der Herr denket an uns" BWV 196

用途 ： 結婚式(？)

初演 ： 1708年 6月 5日 Mühlhausen(ミュールハウゼン)にて

カンタータ196番は、J. S. バッハの数多いカンタータの中でも初期(彼がミュールハウゼンの教会オルガニストをつとめていた1708年頃とされている)の作品のひとつであり、総演奏時間は15分程度のごく小さな曲ながら、「神の祝福」への喜びと感謝を主題とし、明るさと躍動感にあふれた印象深い作品である。

優雅でのびやかな旋律を持つ第1曲シンフォニア。冒頭の数フレーズを聴いただけで、このカンタータが安らぎと幸福感に満ちたものであることを感じさせる。

第2曲はイスラエルの民の喜び。合唱で「主はイスラエルの家を祝福し、アロンの家を祝福する」と歌われる。フーガ部分は人々が次々に主への感謝の気持ちを口にするようであり、最後には全員で力強く唱和する。

第3曲は主を畏敬しつつもその祝福を心から感謝する信者の思いが、ソプラノソロで歌われる。自然に湧き上がり、ほとばしるような旋律と、時折みられる32分音符の動きが印象深い。この曲が短調なのは主への「畏敬」の念を表しているのだろうか。

第4曲はテノールとバスの2重唱が、「主はあなた方とその子供たちを祝福する」と歌う。ゆったりとした3拍子のメロディーにのせ、爽やかに、力強く語りかけるのを聴くと、天使(ガブリエルやミカエルのような大天使)が民衆に向けて述べているような気がする。最後にもう一度言葉がふわりと投げられ、余韻を残して終わる。

第5曲。喜び勇んで駆け出すような前奏に導かれ、「あなた達は主に祝福されし者」と高らかに歌い上げる。何度も繰り返されるアーメン唱の華やかなかけあいが主を讃え、喜び感謝する気持ちを表して余りある。最後には高揚した心も落ち着き、確信に満ちて静かに歌い収める。

(A.Murohashi)

196 "Der Herr denket an uns"

1. (Sinfonia)

2. (Coro)
Der Herr denket an uns und segnet uns,
er segnet das Haus Israel,
er segnet das Haus Aaron,
Der herr denket an uns!

3. (Aria)
Er segnet, die den Herrn fürchten,
beide, Kleine und Große.

196「主はわれらを御心に留めたまえり」

1. (シンフォニア)

2. (合唱)
主は私たちのことを考え、そして私たちを祝福する、
彼はイスラエルの家を祝福する、
彼はアロンの家を祝福する、
主は私たちのことを考える！

3. (アリア)
彼は(主は)祝福する。主を畏怖するものを、
小さなものも大きなものも。

4. (Duetto)
Der Herr segne euch
je mehr und mehr, euch und eure Kinder.

5. (Coro)
Ihr seid die Gesegneten des Herrn,
der Himmmel und Erde gemacht hat. Amen.

4. (二重唱)
主は祝福する、君たちを、
さらにさらには君たちも、君たちの子孫も。

5. (合唱)
君たちは天と地を創りたもうた主に、
祝福されしものである。アーメン。

（歌詞対訳　A.Kawamura）

カンタータ131番『深き淵よりわれ汝に呼ばわる、主よ』

Kantate Nr.131 "Aus der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir" BWV 131

用途 ： 悔い改めの礼拝（？）

初演 ： 1707／08年　Mühlhausen（ミュールハウゼン）にて

ミュールハウゼンの町を襲った1707年の大火。焼け出された人々。灰と化した家々。カンタータ「深き淵より」はこの大火で失われた多くの命を追悼する礼拝で初めて演奏されました。この年バッハは23才。19才で就任したアルンシュタットの教会オルガニストの職を聖歌隊メンバーとのトラブルもあって退任。ミュールハウゼンに新天地を求めた彼のこの地におけるカンタータ第1作でした。

このカンタータは哀悼の音楽です。ルターが訳した詩編第130編をテキストとするこのカンタータでバッハは小編成の楽団を使って17世紀のアンサンブルを確立。バイオリン1名　ビオラ2名　オーボエ1名 コントラバス1名　合唱団とソリスト2名という小編成で大きな成果を収めたのです。私たち Ensemble14 が第1回コンサートで演奏したカンタータ「神の時」でも採用されたコラールの旋律がたぐいまれな効果を生み出しています。

詠嘆調の序奏（シンフォニア）に続く合唱は「おお、神よ」と何度も叫びます。「ここから先は自制心をなくしていい……」辻先生の言葉に素直に反応する私たちはまだ若かったバッハの熱情そのままに走り抜いてしまうのかもしれません。代わって第2曲はソプラノのコラールとバスソロの組み合せ。神の裁きを恐れ憐れみを乞うこのアリアはソリストにとって難曲中の難曲です。次の第3曲の合唱は神の救いを待ち望む人々の思いを明るい色調で歌い上げます。この思いは夜明けを待ち望む夜警の姿を歌うテノールのソロに引き継がれますが、最終曲でこの願いは神の救いへの確信に変わります。「イスラエルよ」の叫びに続く合唱は悲しみや迷いを乗り越えた歌声となることでしょう。

(S.Naitoh)

131 "Aus Der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir"

1. (Coro)
Aus der Tiefe rufe ich, Herr, zu dir.
Herr, höre meine Stimme,
laß deine Ohren merken auf die Stimme
meines Flehens!

2. (Aria)
So du willst, Herr, Sünde zurechnen,
Herr, wer wird bestehen?
Denn bei dir ist die Vergebung,
daß man dich fürchte.

Erbarm dich mein in solcher Last,
nimm sie aus meinem Herzen,
dieweil du sie gebüßet hast
am Holz mit Todesschmerzen,
auf daß ich nicht mit großem Weh
in meinen Sünden untergeh,
noch ewiglich verzage.

3. (Coro)
Ich harre des Herrn, meine Seele harret,
und ich hoffe auf sein Wort.

4. (Aria)
Meine Seele wartet auf den Herrn
von einer Morgenwache bis zu der andern.

Und weil ich denn in meinem Sinn,
wie ich zuvor geklaget,
auch ein betrübter Sünder bin,
den sein Gewissen naget,
und wollte gern im Blute dein von Sünden
abgewashen sein wie David und Manasse.

5. (Coro)
Israel hoffe auf den Herrn;
denn bei dem Herrn ist die Gnade
und viel Erlösung bei ihm.
Und er wird Israel erlösen aus allen seinen Sünden.

131「深き淵よりわれ汝に呼ばわる、主よ」

1. (シンフォニアと合唱)
主よ私は深きところよりあなたに叫ぶ。
主よ私の声を聞きとげられよ、
哀訴する私の声に耳を傾けられよ！

2. (コラール付きアリオーソ)
主よあなたが罪の責任を負わせるつもりなら、
たれが克服できましょうや？
だからこそあなたの許には罪の許しがあり、
そのために人はあなたに畏怖の念を抱くのです。

こんな重荷のある私を哀れんでください、
私の心から重荷を取り去ってください、
あなたが十字架にかかり死の苦しみをもって
罪滅ぼししてくれたことなのだから、
それゆえ、大いなる痛みともに私が
私の罪の中で滅びることもなく、
永久にひるむこともないのです。

3. (合唱)
私は主を待ち焦がれる、私の魂は待ち焦がれる、
私は御言葉に期待する。

4. (コラール付きアリア)
私の魂は主を待ち望む
まるで夜毎朝を待つ夜警のように。

私の思いの内で
かつて嘆き訴えた如く、
今、悩める罪人であり
良心にさいなまれていても
願わくばダビテとマナセのように、あなたの血で
罪を洗ってきれいになりますように。

5. (合唱)
イスラエルよ　主に期待せよ
なぜならば主のもとには恩寵があり
沢山の救いも主のもとにある。
主は総ての罪からイスラエルを救ってくださるだろう。

（歌詞対訳・A.Kawamura）

カンタータ182番『天の王よ、汝を迎えまつらん』

Kantate Nr.182 "Himmelskönig, sei willkommen" BWV 182

用途 ： 棕櫚の日曜日

初演 ： 1714年 3月25日 Weimar(ヴァイマール)にて

カンタータ182番は、バッハがザクセン＝ワイマール公爵より「楽師長」(コンツェルトマイスター)の称号を与えられ、「月に1曲」のカンタータ提供を求められて作曲した、楽師長就任後第一作目のカンタータです。

このカンタータは、ソナタ・自由合唱曲・レチタティーヴォ・アリア・コラール合唱曲で構成されています。

冒頭では、アダージョのテンポでヴァイオリンとリコーダーが付点のリズムでかけあう、優雅なソナタが演奏されます。それはまるで、「天の王」がロバに乗って民衆のもとへ歩んで行く様子を表しているかのようです。

続く2曲目では、天の王を民衆が口々に「迎えまつらん」とするように、合唱によって喜ばしいフーガが演奏されます。 ここで立ったバスは、「見なさい、私は来る。」とキリストが自ら来臨を告げる、詩編の言葉をレチタティーヴォで歌います。

ここから、この世の救いのために自らの身を犠牲にした主の「強い愛」を告げるバス、「救い主の御前にひれ伏しなさい」と歌う、このカンタータの中心をなす長大なアルトのアリア、そしてイエスの受難の光景を語るテノール、の3曲のアリアが続きます。

イエスの受難を語るテノールのアリアを受けて、「イエスよ、あなたの受難は私には、純なる喜び」と受難を自らの喜びとする民衆の心を表すコラール合唱が展開され、最後に、合唱が、

「さあ、喜びのサレム(イェルサレム → 聖地)に行こう。
王に従って、愛と受難の道へと赴こう。
王は先に立って、道を開いて下さる。」

と、8分の3拍子のリズムに乗って喜ばしく歌いこのカンタータが閉じられます。

(T.Koizumi)

182 "Himmelskönig, sei willkommen"

1. (Sonata)

2. (Coro)
Himmelskönig, sei willkommen
laß auch uns dein Zion sein!
Komm herein!
Du hast uns das Herz genommen.

182「天の王よ、汝を迎えまつらん」

1. (ソナタ)

2. (合唱)
天国の王様 歓迎すべきもの
私たちもあなたのシオンにいさせたまえ！
私たちの中に住みたまえ！
あなたは私たちの心を奪ってしまったのだから。

3. (Recitativo)
Siehe, siehe, ich komme,
Im Buch ist von mir geschrieben:
Deinen Willen, mein Gott, tu ich game.

4. (Aria)
Starkes Lieben, das dich großer Gottessohn,
von dem Thron deiner Herrlichkeit getrieben,
daß du dich zum Heil der Welt als
ein Opfer fürgestellt,
das du dich mit Blut verschrieben.

5. (Aria)
Leget euch dem Heiland unter, Herzen,
die ihr christlich seid.
Tragt ein unbeflecktes Kleid eures Glaubens
ihm entgegen,
Leib und Leben und Vermögen sei dem König
jetzt geweiht.

6. (Aria)
Jesu, laß durch Wohl unt Weh
mich auch mit dir ziehen.
Schreit die Welt nur "Kreuzige!"

so laß mich nicht fliehen,
Herr, vor deinem Kreuzpanier;
Kron und Palmen find ich hier.

7. (Coro)
Jesu, deine Passion ist mir lauter Freude,
deine Wunden, Kron und Hohn meines
Herzens Weide;
meine Seel auf Rosen geht,
wenn ich dran gedenke,
in dem Himmel eine Stätt uns deswegen schenke.

8. (Coro)
So lasset uns gehen in Salem der Freuden,
begleitet den König in Lieben und Leiden!
Er gehet voran und öffnet die Bahn.

3. (レチタティーヴォ)
見よ、私は来る。
私のことは書物(聖書)にかくの如く書かれている。
我が神よ　私は喜んで御心のままに。

4. (アリア)
強い愛、それこそあなたを、大いなる神の子よ、
あなたの栄光の王座から駆り立てた。
つまり、あなたは御身をこの世の救済のために
生贄としてたたせた。
つまり、あなたは御身を血をもってささげた。

5. (アリア)
救い主のもとに自らを横たえよ
キリストのものである心よ。
汚れのない衣を君たちの信ずる彼に
寄せなさい
肉体と生命と財産はいまや
王にささげた。

6. (アリア)
イエスよ　幸せのときも苦しみのときも
あなたの許に引き寄せてください
世界がただ「十字架に付けろ！」と叫ぶだけであっても

私を解放することなかれ
主よ私はあなたの十字架の旗印の許で
冠と勝利の栄誉を見つける。

7. (コラール)
イエスよ、あなたの受難は私の大いなる喜び、
あなたの傷と冠、嘲笑は
私の心の牧場。
私の魂は私があなたの受難を思うとき、
バラ園に向かっていく
それゆえ私達に天国の片隅を贈りたまえ。

8. (合唱)
さあ、喜びのサレムへ行こう、
王様と共に愛と苦悩の地へ行こう！
王様は先に行き、道を開いてくださる。

（歌詞対訳・A.Kawamura, K.Nakagami）

指揮　辻（つじ） 秀幸（ひでゆき）

1981年東京芸術大学声楽科卒業。1984年同大学院独唱科修了。渡邊高之助、関 種子、下野 昇、水谷ひさ子の各氏に声楽を、小林道夫、佐々木正利の各氏に宗教音楽を学ぶ。1985年ミラノ市に留学。L. グゥアリーニ女史に師事し、ドイツ・リート、宗教音楽を学ぶ。国内では宗教曲のソリストとして活躍するほか、オペラにも多数出演している。最近はアマチュアコーラスの指揮、発声指導も多く手掛けている。日本合唱指揮者協会会員。洗足学園音楽高校非常勤講師。共著に「わかって歌おう－レクイエム発音講座」がある。

アンサンブル・フィアツェン
Ensemble14

辻 秀幸先生の呼びかけにより、J. S. バッハのマタイ受難曲を歌う目的で1998年8月に発足したアマチュア合唱団。1999年4月奥沢教会(世田谷区)にて「マタイを歌う会」とともにマタイ受難曲の抜粋演奏(ピアノ伴奏)に参加。同9月に第一回演奏会でカンタータ150番、155番、106番を演奏。2000年4月に田園調布教会におけるマタイ受難曲の全曲演奏に第二コーラスとして出演した。
"14"はバッハ自身も用いたといわれる Bach を表す数字で、b = 2、 a = 1、 c = 3、 h = 8 を足し合わせたもの。

Ensemble14 メンバー

指揮者 ： 辻 秀幸　練習ピアニスト ： 田城 章子

代 表 ： 中神 康一　副代表 ： 武内 崇史

Soprano　大山永里子 鹿島 晶子 加藤かおり 川村 昌子 木藤 裕子 木下 祐子 小林 総子
鈴木 幸穂 林 玲子 室橋 明美 (大久保淳子 田中百合子 難波 愛 山崎 晃子)

Alto　篠原 直子 富岡 愛子 中神 康一 日向 典恵 (大石 明子)

Tenor　小泉 孝博 小林 尚弘 内藤 秀司 室橋 義明 山田 陽史 (中原 浩一)

Bass　大石 峰士 武内 崇史 林 秀博 (佐藤 紀之)

☆ 一緒に歌いませんか ☆

Ensemble14では一緒に歌って下さる方を随時募集しております。バッハが大好きな方はもちろん、バッハが初めての方、合唱が初めての方も歓迎です。次の演奏会は2001年3月17日にすみだトリフォニーホール小ホールでカンタータ22番、23番、48番の演奏を行う予定です。

指 導	辻 秀幸 先生
練習日	毎週土曜日(10:00～12:00 または 13:00～17:00)
練習場所	自由が丘(東急東横線・大井町線) 武蔵小杉(東急東横線)など
お問い合わせ	武内(Tel 042-993-6889) 室橋(email YRM01040@nifty.ne.jp)